

展覧会を終えて

文化的行事委員会委員長

今回は、児童による展覧会づくりを進めるため、6年生による展覧会実行委員会が発足しました。テーマの決定に始まり、展覧会だより、鑑賞掲示板などの工夫をして、主体的に取り組みました。鑑賞掲示板「イイ所発見 Space」には、子供たちが鑑賞した作品のよさを伝え合えるように、星の形のカードを作りました。心に残った作品の良いところや感想を書き、貼っていました。

展覧会を通して、子供たち同士のつながりがあふれていました。上級生は下級生の作品を見て、自分たちの成長を振り返り、下級生は上級生の作品や実行委員の活動を見て、あこがれや希望をふくらませていました。作品を一生懸命に作り、最後まで仕上げた子供たち全員に大きな拍手を送りたいと思います。

「図工」生命を見つめる「見える通りに描く絵」実践

スマートフォンやパソコンなど児童の周りには無限ともいえる情報量が存在する中で、今求められる感性は「感じることの質を高めること」、仮想現実とつながるのではなく、リアルな「自然の営みとつながること」、そしてそれに純粹に「心動かされる感動の体験になること」であると考えます。この問題意識にたって、図画工作科では自分の眼で見えるとおりに描く絵画を通して、人と人、人と自然のつながりを通して実感させる実践を6年生「油彩で描く〈大切なもの〉」で行っています。

これまでの人生の中で最も思い入れのある「大切なもの」を持ち寄り、じっくり向き合い、見つめて、見える通りに油彩で描くというシンプルな題材です。イメージや空想ではなく、思い入れのある実物をモチーフとして描く活動であることから、児童は練習でボロボロになったサッカースパイクや、お母さんに作ってもらった洋服、幼稚園のころの帽子など、それぞれが自分にとっての宝物を持ち寄り、じっくりと見つめて一心にキャンバスに向き合います。見える通りに描き「生命」を見つめる実践は、バーチャル・リアリティーのように一方的に受動的、間接的に受け取る営みではなく、「生命の美しさ」を見出す能動的、直接的な営みであり、人と人、人と自然のつながりを通して「生命」に眼を向けるものと考えます。また、「大切なもの」を描くことは、児童がこれまでの自分の歩みを肯定的に受け入れ、振り返り、新たな夢へと進むという自己有用感、自己肯定感を育む過程となります。この実践を通して、今後も図工の中で児童に、「生命の大切さ」を伝えていきたいと思っています。

文部科学大臣優秀教職員表彰

上で紹介した「見える通りに描く絵」や、展覧会でも展示した「共同でつくりだす活動」として、日本の古典名画を題材にした貼り絵など、長年にわたり二小で進めてきた様々な実践が、学校教育における教育実践等に顕著な成果を上げたと認められ、3月6日（月）に表彰されることになりました。子供たちに対する思いに応え、子供たちが生き生きと活動してきたことが全国で認められた理由の一つと言えます。みんなにとってもうれしいことです。